



慶應義塾大学ビジネス・スクール

介護保険事業所パッション

5

— 震災時のマネジメント —

(B)

避難

10

「避難の際に起きうる圧迫骨折等のリスクを考慮した上でも、津波から逃れることを優先すべきだ」それが最終判断であった。

河村はスタッフに全利用者を各建物の1階に集めるよう指示した。停電で建物内の廊下や階段は暗く、倒れた家具や飛散した物を避けなくては通れないほどだった。ショートステイ棟では、介護スタッフ達が

15

シーツや毛布を担架代わりにして、2階の寝たきりの利用者達を上手に1階まで下ろした。日頃の避難訓練の成果が出ている、と河村は思った。

北西の高台にある中学校までは車で片道5分程だ。グループホームの利用者16名とショートステイの19名を、職員の自家用車8台でピストン輸送することにした。

河村らは、利用者の中でも自立度が高く避難先で待機できるような軽度の利用者を先に車に乗せた。

20

体調を崩したり不穏になったりする可能性のある利用者は後発の組にした。座位に不安のある者は助手席を倒して運んだ。一番最後に、胃瘻を造設している者や、終末期のがん患者を運ぶことにした。体温調節が難しい重症の利用者を出発直前まで施設内で休ませ、避難先でもエンジンの暖かさの残る車中にギリギリまで留まらせることで体力の消耗を防ごうと考えたのだ。

16時05分に最後の避難車がパッションを出発した。河村は、家族やスタッフが施設に来る場合に

25

備え、パッションの全てのドアを開錠し、高台の中学校に避難する旨を知らせる貼り紙を掲示し、最後

.....

本ケースは、高木晴夫の指導の下、慶應義塾大学 HSR（ヘルスサービス研究会）の伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄が公開資料および複数の被災施設での取材に基づき作成したものである。教育目的に沿って複数の施設の経験を合成しており、実在する施設の経験とは異なる部分がある。クラス討議での使用を目的としたものであり、特定の経営管理上の適切あるいは不適切を例示しようとするものではない

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は <http://www.bookpark.ne.jp/kbs/> から。

30

Copyright © 伴英美子、秋山美紀、渡邊大輔、中島民恵子、古城隆雄（2018年6月作成）